こんなに

アロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんなに

【Ｎコード】
Ｎ４５３２Ａ

【作者名】
アロウ

【あらすじ】
突然訪れた不思議な出来事に翻弄され、それでも幸せを目指してそれに荒がい、奇跡をも起こす少年と少女の物語。

1：不変こそ幸福

いつも通りの朝というのは、つまり何の変哲もなく変わり映えのしない朝ということだ。つまり

「早く起きなさい！！！」

…こういうことだ。

そりゃあ、俺だってこの変哲の無い毎日がつまらなくなったときがあったよ。でも、この変哲の無い毎日こそが、幸せの象徴だったと今更ながら気付いたんだ。

君が長年焦がれてやまなかった幸せは、誰もが疎ましく思うような変哲の無い毎日の中に隠されていたんだ。

ゴメンな。俺だって、ただの人間なんだよ。

その日俺は、皆と同じように『平穏の終り』を望んだ。

「ねぇ、どうして君はいつも遅れて来るのかなぁ？！」

「本当にスミマセン、イリ様。お詫びにケーキをご馳走させていただきます」

怒った仕草をして腕を組んでいたイリは、俺が口にした『ケーキ』という単語一つで機嫌を取り戻した。

「しかたない、許そう！！！」

「かたじけない。……安いなぁ～」

歩きながらボソッと言うと、前を歩いていた彼女は振り返った。

「なんだってぇ～？」

「お前のご機嫌とりは、簡単でいいって言ったんだよ」

シシシと歯を剥き出して笑うと、またイリは腕を組んだ。

「やっぱり許さん！ケーキ三つ食べてやる！！！」

「あ、バカ嘘ごめんなさい！さすがに無理！！！」

「許さん。反省の色が伺えませんなぁ？」

「マジゴメンマジごめん！今度から、目覚まし五分前にセットするから！！！」

「五分前？何の五分前？」

「約束の時間の五分前」

「今までは？」

「約束の時間にセット」

「じゃぁ、あたしがここで待ってる時に君は起きるわけ？！」

「うん」

「…し、信じられない。。。愛しい彼女が寒空の下健気に待ってるのに、その直前まで愚かな彼は布団でぬくぬくと…。あたしが肺炎にかかって死んで、あたしの大切さを痛感してその府抜けた顔を泣き腫らせぇ！！！」

うわ、やばい。マジで怒ってる。プイとそっぽを向いたイリの顔を下からソロリと覗きこむ。一瞬目が合うと、すぐにまたプイと目を反らされた。

「ごめんて」

「…」
「……ケーキ」
「三つ」
「……二個」
「三つ！！！」

財布を見る。ちょっと無理するくらいなんだ、彼女の機嫌を直す方が大切だと財布が厳しく訴えてきた。
はぁ～…。長い溜め息のあと

「…三個ね」

諦めた俺はそう言った。
イリの機嫌はまたすぐ直った。

「まいどあり～♪」

彼女の笑顔が大好きな俺だが、この時ばかりは悪魔に見えた。自業自得だけど。

2：日常の終焉

こんな毎日が続いたって、つまらないだけだ。

そう思っていた。

黄色の手袋を見つめる彼女の横顔は、さして物欲しそうな顔ではなかった。

「イリ？手袋？」

「ん？うぅん、その横」

ガラスケースの中の手袋の横を見てみたが、そこには何もなくただがらんどうの空間が漂っているだけだった。

「何もねぇじゃん」

「今はね。…前は、三日前にはコサージュが置いてあったの」

「ふ～ん。探せばどっかにあんじゃねぇの？」

「うぅん、ないんだって。最初に見たときに店員さんに聞いたら、置いてあるのが最後の一個だって言ってた」

「そっか、残念だったな」

「ん…」

諦めたような残念そうな、読み取りずらい表情のイリを連れて俺は

店を出た。

「なぁ、腹減らん？」
「え～？早いよぉ」
「だって、俺朝飯食ってねぇもん」
「起きるのが遅いからでしょ。そんなことしてたら、太るぞ～」
「ケーキ三個食べるって言った女に言われたくありませんな」
「な！？そ、それは、君への罰なんですよ～だ」
「ほ～？じゃぁ、一個だっていいじゃん？」
「え？！やだやだ、ちゃんと奢れ！嘘つき！！！」

ぐぅぅ

俺の腹が鳴り、二人は顔を見合わせてクスクス笑った。近くの喫茶でお茶をすることにした。

「でさ、そんときアイツが…イリ？」

軽食を食べながら話していたとき、俺は彼女の異変にやっと気付いた。

「イリ？イリ！？」
「…」
「イリ！！！」
「…あ、あたし…なんか…変」

俺が席を立ち上がるのとイリが椅子から転げ落ちるの、どっちが早かっただろう。

彼女の体が床を叩く音と共に、日常の扉は閉じられた。

3：願望の途中

扉を少し開き、中を確認する。

「…帰った？」

「うん、追い返した」

「は～、よかった。っと、ゴメンごめん」

「ホント、君はあたしの親が苦手だねぇ～」

「しょうがなくねぇ？俺、お前が倒れたときに一緒にいた上に、その直前まで寒空の下で待たせてたんだぞ？今の俺は人ではなく、ただの罪悪感の塊なんだよ」

ケラケラ笑った後、イリがふぅと小さく溜め息をついた。

「大丈夫か？俺、うるさかった？疲れたなら寝ていいぞ？？？」

「お、あたしが病気だと優しいんだ？」

「俺はいつでも紳士だろ」

いつもの調子でちょっとふざけて冗談を言ったら、いつも通りにイリは

「…そうだね」

返してくれなかった。

え？どうしたんだろう。いつもだったら

「え～？君が紳士だったら、世界中の男が紳士だよぉ」

と笑いながら言ってくれるはずなのに。

「…やっぱ、疲れてるのか？」
「え？うぅん。なんで？」
「いや、なんか反応がおかしいっていうか…ごめん、何言ってんだろ、俺。帰るわ。じゃ！！！」
「え、あ…うん、バイバイ…」

どうしたんだろう。変だ。イリが変だ。俺も変だ。妙に気を使う。いつものあの砕けた会話が嘘のようだ。

病院から帰ってきて部屋の中をウロウロしていると、いろんな事を想像してしまった。

イリの病気は、重いのだろうか

イリの病気は、治るのだろうか

イリが病気でどんどん変わっていったら

イリの病気に対して、何か出来ることはあるのだろうか

怖かった

前のような平穏を、切に願った

現実とは、善であれ悪であれ強い思いの方を反映する。
それが現実と離れようとも…

4：記憶の消滅

もし、こんなにイリを好きにならなければ、俺はこんなに苦しまなかったのに。

病院の白い壁に、微かにつたうツルを見つめて、俺は溜め息をついた。ツルはイリの病室まで届いていた。まるで、眠り姫を外敵から守り王子の訪れを待つ城の外壁のようだった。

わからない。昨日の違和感は、結局なんだったんだろう。

「イリ〜…」
「…おはよう」
「あ、ぉおはよう！」
「何焦ってるの？」

こんなときに、いつもはクスクスと笑っているはずのイリは、静かにふんわりと笑って俺から視線を外した。

「なぁ…」
「ん？」

落ち着き払ったイリは笑顔で、また振り向いた。あまり長くない髪が風もないのになびいた。ベッドの白が顔に光を呼び込み、きららかな微笑みがあまりに自然な女らしさで、あまりにイリらしくない不自然さで、一瞬ドキリとした。

「あ、あの…前に言ってたコサージュって、どんなやつ？」
「コサージュ？」
「ほら、店の中で言ってたじゃん、最後の一個のコサージュ」
「…？」

もしかして、覚えていないのだろうか。何のことだかわからないとでも言いたそうに、微かに首を傾げて考え込んでしまった。

「…ぁ…えっと…」

何も言えなかった。
何がどうなったのかわからない。イリに何があったのかわからない。
この日を境に、俺の知っているイリは消えた。

5：奈落の声色

声が、聞こえた。小さな声だったが、確かに聞こえた。
だが、何て言っているのかは聞き取れなかった。

「退院？」
「うん。検査が一通り終わって、異常無しって出たから」
「…そっか、異常無しか…」
「うん…あんまり、嬉しそうじゃないね？」
「…いや、これでやっと病院通いとおさらばか！やれやれだ！！！」
「…ごめんね、毎日通わせちゃって」
「え、あ、いや、別にそういうつもりで言ったんじゃ…」

ダメだ。やっぱりおかしい。

退院の日は親が来るし何日かは家でも安静にしなきゃだからと、明日から5日間イリと会えない日を約束された。

きっと、健康が取り柄だったから入院という事態に弱気になっていただけだ。五日後は、きっと元気でうるさいイリに戻っているハズだ。

「…あ、れ…？」

約束の時間１０時。…を少し過ぎた只今１０時５分。いつもなら俺はもっと遅く来て、イリの怒りの鉄槌を喰らうのだが、最近まで入院してた人を待たせるのはいけないと思い、いつもより早く約束の

場所に着いた。結局遅刻したが。
しかし、いつもはここで
「遅い！！！」
と言って待っているイリの姿がない。
少し待ってみたが、一向に来ない。ケータイを見るが、メールも着信もない。
イリが寝坊？ありえない。
また具合いが悪くなった？そうかもしれない。きっとそうだ。どうしよう、イリの家に行ってみようか？

「ごめんね～」

気の抜けた声と共にイリが現れた。１０時２３分。ありえない。ありえないありえないありえない！！！絶対おかしい！！！
不安が爆発した俺は、イリの肩を掴んで叫ぶように問いただした。

「どうしたんだよ、イリ！お前なんか最近変だぞ！？なんかあったんなら言ってくれよ！！！」
「…別に、普通だよ？」

俺を安心させるためだろうか、イリは笑顔を浮かべて静かに言った。
しかし、その冷たい笑みに俺の不安は余計駆り立てられた。

「違うだろ！？いつものお前なら、変なこと言うなって怒りながらもっと無邪気に笑ってたよ！！！」
「…何言ってるのかわかんない。あたしはアタシだよ」

俺の手を振りほどいて
「帰る」
と一言言って、イリは背中を向けた。その瞬間…

『……実験…し…い…』

イリの耳元からザザっという機械音と共に、誰かの声が聞こえた。

俺の思考は提出した。しばらく動くこともできなかった。

た。

俺は、しばらく動けなかった。

6：偽物の欠片

俺の手はあまりに短かった
月を望んだわけではない
星を願ったわけではない
ただ君を抱き締めたかっただけなのに
それさえ許されなかった

「今…なんて…？」
「だから、しばらくあの子に近付かないでって言ったのよ」

イリがいなくなった待ち合わせ場所で一人佇んでいた俺に声をかけたのは、イリの母親だった。今まであまり話したことはなかったが、知らない人ではない。何となくお堅そうで好きなタイプの人間ではないが。
おばさんに言われるがままに、近くのベンチで二人並んで座っていた。

「あの子、今ちょっと変でしょう？」
「…」

肯定も否定も出来なかった。そんな俺を見て、おばさんは優しく微笑んだ。

「優しい子ね。…あの子、イリはね。今ちょっと体調が安定しないから、言動がおかしいのよ。だから、あなたも戸惑っちゃうでしょ？でもその戸惑ってるあなたを見て、余計あの子は焦っちゃうと思

うのね。だから、しばらくあの子に会わないで欲しいの」
「…ぁ…えっと…」
イリがおかしいのはわかってる。だが、体調のせいか？俺と会わなければ良くなるのか？
しかし、どれだけ考えを巡らせても答えなんてわからないのだから、ここは言う通りにしておくべきなのだろうか。
「…わかってくれる？」
「……はぃ…」
追い詰められた俺は、つい返事をしてしまった。
「ありがとう。…聞きわけの良い子」
なんとなく、誉められたというより品定された気がした。
「あの、イリは…イリさんは、そのことはもう了承してるんですか？」
「……えぇ、そうよ」
間があった。まぁ、さっきイリが帰ってその直後だもんな。少しの嘘は、親だし大人だし仕方がないということで許した。
「…メールとかも…？」
「ごめんなさいね」
「学校は？」
「しばらく休ませるわ」
「…ノートとか、イリさんの分も俺がとっておくから気にせずゆっくり休んで下さいって伝えて下さい…」

ありがとうと呟き、おばさんはベンチを立った。

また、一人になった。いろいろ考えて独りで沈んだりしないために、俺は足早に帰った。

ケータイがバイブになっているため、震えていることに気付かなかった。

7：足枷の命綱

しばらく、イリのいない生活が続いた。周りの人は、ただの病気だと信じているようだった。

離れていると、どれだけ自分の中にイリが浸透していたのかを身に染みて痛感した。
狂おしいくらい、イリに会いたい日もあった。

そういえば、イリの母親が俺に宣告した日の夜、ケータイに一通の着信があった。番号は、イリのケータイ。
だが『近付くな』と言われてしかも俺は『はい』と答えた手前、よくわからないがイリに電話を返す気にはならなかった。それ以降、向こうからの連絡は途絶えた。

「なぁ、お前もこれからゲーセン行かね？」
「んー…やめとく、もう帰る。金ねぇ」
「なんだなんだ、イリちゃんのお見舞いならそう言えよ」
「ばーか、ちげぇよ」
「ヒュー♪…友達なんて、結局恋人には勝てないんだ…！！！」

友達が泣き真似をしているのをシカトして一人で帰路に着いた。

家の近く、いつもイリと別れるT字路に通りかかったとき、後ろに人の気配を感じた。
辺りはまだ明るいとはいえ、いつも人通りが少ない。荒い息遣いが徐々に近付いてきた。変質者か！？と思ったが、振り返った俺は唖

然とした。

「……イリ？！」

思いもよらない再会となった。

「イリ、お前どうしたんだ！？」

漆黒の艶やかな髪は痛々しい茶色に。イリが買うはずもなさそうな淡い清楚漂う服。そしてなにより…右腕の多量の出血。

「この怪我、どうしたんだよ！？」

イリの肩をつかんで問いただした。しかし、表情を歪めてしゃがみこんでしまった。

「……なん…く…の？」

消え入りそうな声で、イリは呟いた。

「え？何？！」

「なんで…れ…く…の…？」

「…？」

キッと強い目つきで、顔を上げたイリの目には涙が溢れていた。

「なんで、連絡くれないの？！」

「え…？」

どういうことだ。俺は、イリの母に頼まれて…まさか？！

「何も、聞いてない…のか？」
「何もって？」
「俺、お前の母親に頼まれたんだぞ。イリにしばらく近付くなって」
「お母さん？！」
目を見開いたイリの表情は、驚愕というより恐怖に近かった。
「…とにかく、俺んち行こう。手当てしなきゃ」
「…ん」
手を差し出す。イリの小さな両手は、俺の手を握った。立ち上がった後も、イリは俺の手をはなさなかった。少し遅れてついてくるイリを連れて、俺は自宅へ向かった。この手を、はなしたくなかった。ずっとイリの体温を感じていたかった。
「…君は……なんだよ」
「え？」
イリの言葉は俺に届かず、空気に混ざって消えていった。
君は、私を繋ぎ止める最後の命綱なんだよ

8：血約の誓約

どうしてあの時…
なぜその時に…
後悔ばかりが残る
なぜなら、俺は子供過ぎたからだ
いや、大人になってもきっと同じだったかもしれない

「…なぁ」
「ん？」

イリの傷は、思ったより浅かった。出血量を見ると腕が取れたのかと思うほどの血だったが、実は擦り傷程度の傷が広範囲に渡って広がっているだけだった。
とはいえ、尋常ではない傷の広さだった。ガーゼで覆いきれるかどいか。

「この傷、どうしたんだ？」
「…猫にひっかかれた」
「どんだけ強い猫だよ？！」
「ん～、ゴジラくらい？」
「ゴジラと戦ってこの傷だけだったら、お前人間じゃねぇな」
「なんだとぉ！」
顔を見合わせクスクス笑った。久しぶりのやりとりだった。なんて懐かしいのだろう。

「…もう良くなったんだよな。学校にも、くるんだろ？」
「…どうだろ」

「なんで？まだ具合悪いのか？」
「…ゴジラの傷が治んなきゃなぁ～」
一人でクスッと笑って言ったイリは、なんだか痛々しかった。俺は物凄い不安に襲われた。
「なぁ、茶化さないで教えてくれ。本当はなんなんだ？どんな病気なんだ？なんで怪我なんてしたんだ？俺は、何も出来ないのか！？」
「…」
イリは黙りこんだ。イリの手を掴み、俺の意思を無視して目から涙が溢れた。
「…頼むよ、不安なんだよ…！！！」
「…ゴメンね」
「謝んなよ…」
「…うん。ゴメン」
小さな手は、震えていた。
「ひとつだけなら…」
「え？」
「さっきの質問。ひとつくらいなら、教えてあげてもいいよ」
「じ、じゃあ…！！！」
「ただ……後悔するよ？」
「…」
少し迷ったが、力強く答えた。
「…かまわない！！！」

「…ありがとう、本当は、ずっと君に言いたかった。助けてって言いたかったの…」
「俺はずっと、助けてって言って欲しかった」
「…不安にさせてゴメンね。……あたしには、姉がいたの…」
涙を一雫落とし、静かにイリの口は言葉を生み始めた。

後悔は、絶対にしないと誓った。己に。イリに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4532a/

こんなに

2010年10月17日07時21分発行